

# 政治・メディア・政治漫画(4)

茨木正治

## I 問題の所在

### II 政治シンボル論と政治漫画

#### (1) 政治シンボル論の系譜

1. 「シカゴ学派」——メリアムとラスウェル——

2. M・エーデルマン——政治儀礼と政治言語——

(以上 第三卷第二号)

3. シンボル操作研究の流れ

4. 最近の政治シンボル研究

① 八〇年代以降の政治シンボル研究

② 儀礼としての選挙

(以上 第四卷第三号)

5. 日本政治シンボル研究

① 日本の政治シンボル研究の系譜

(以上 第四卷第四号)

#### (2) 隣接諸科学の政治シンボル研究

1. 哲学・言語学・人類学

2. 社会学

① シンボリック相互作用論

② ドラマ論——ドラマティズム・ドラマトウルギ——

③政治漫画との関連——「背景」分析から「内容」分析へ——  
(以上本号)

III マス・コミュニケーション論と政治漫画

- (1) 「効果研究」の系譜
- (2) 「現実の再構成」論と政治漫画
- (3) 批判学派の理論との関連

IV 結論と展望

(2)隣接諸科学の政治シンボル研究

政治を人間行動の一環としてとらえるのならば、「政治シンボル研究」は人間の行動におけるシンボルの研究を外延としてもっていることになる。しかしながら、人間行動を総体的に理解をするためには、あらゆる人文・社会科学の領域を概観する必要がある。これは筆者の能力を超える。そこで本稿では、以下のようにして対象領域を制限する。

まず、シンボルそのものの考察への関心から、哲学・言語学・人類学の諸理論の中から「政治シンボル研究」に係の深い研究を概説する。人間の行動においてシンボルがどのような役割を果たしているのかについて考察した研究を検討する。

次に、政治的行為や行動を他の行為や行動と比較する際にシンボルがどのように作用するのかを考えることから、対人・集団における社会的行為や行動におけるシンボルの社会学的な視点に立った研究を概観する必要がある。ここでは、社会学における象徴的相互作用論と「劇学」(dramatism)に関する研究を紹介し、政治漫画との関わりを述べる。

## 1. 哲学・言語学・人類学

「政治シンボル研究」の枠組みの中の仮説や洞察の背景となっているものに哲学におけるシンボル研究がある。シンボルそのものを概念としてどのように規定するかを考察した軌跡がこの分野の研究であるともいえる。

シンボルの概念を考察する研究には、いくつかの特徴がある。

第一には、シンボルと人間との関係について、個人レベルの反応や態度が社会・集団レベルの反応と関連が深いとみなす点である。シンボルによるコミュニケーションの可能性や諸感情・イメージの喚起はこのことを裏付けている。たとえば、ある出来事・人間が政治の文脈で政治神話として神話化されるとき、この神話が集団の凝集力やアイデンティティーの確認として儀式において具現化されるのも、上述した「反応の共有」を念頭に置いているとみられる。

第二には、何をシンボルとするかに関わる問題がある。シンボル素材は「遍在」する。身振り・言葉・映像といった「モノ」のみならず、儀式・出来事・イベントないしは人間の行動それ自体といった「コトガラ」もシンボルとなりうる。これより、何でもシンボルとなるのでは、「これ以外はシンボルではない」とする概念化の作業となじむものではない。

さらに、シンボルがもつ意味は、状況や舞台背景に応じて変化する。このことがシンボルの概念をより不明瞭にする。「改革」を旗印に登場した集団に対して、「旧守」を唱えるはずの集団が「(自己)改革」を提示すること——しかも当該シンボルの内容を規定すべく政治経済権力を行使することも加えて——によって、「改革」シンボルの意味の拡散(摩滅)化を招く場合がある。この場合のシンボル操作は、状況の関数としてのシンボルの特徴を示している。

人間をシンボルを操る存在とし、人間のみが主体的にシンボルを用いてみずからの世界を構築すると述べたのが、

カッシーラー(E. Cassirer)である。生物世界が環境に対して、刺激と反応の二つの体系を用いるのに比べて、人間は「象徴系」(symbolic system)とする第三の体系を使うことができる。このことは、言語や神話、芸術及び宗教などから構成される「シンボルの世界」(symbolic universe)に人間が自ら住むことを示し、それゆえ「実在に直接当面することはできない」(カッシーラー 1953 p.35)。

このような、人間と環境との関係に介在するシンボル(世界)の特徴を述べたのち、カッシーラーはシンボル理解の手掛かりとして、「シンボル世界」の十分な理解を主張する。「シンボル世界」は、実在との乖離を人間に意識させることなく、この場に彼を埋没させることができる。このため、「シンボル世界」への過度の接近(「宇宙」と実在の同一視)はシンボル操作の対象とされやすい。現実の諸問題について「クリーン・ハンド」を求めることを「ナルシズム」として嗤うシニシズムも、また逆に「シニカル理性批判」としてこの嘲笑を現実逃避とすることも、いずれもみずからの立場を絶対視するかぎりにおいて「シンボル世界」への過度の接近を表わしている。

ここにおいて、カッシーラーの指摘を敷衍すれば、次のようになる。前に述べた二つの特徴のうちの「状況の関数」としてのシンボルという特徴に着目するならば、どのような個別の状況で、どういった行為主体間のやりとりの中でシンボルが用いられ、主にどのようなメディアを媒介にして「シンボル操作」が行なわれたか(ないしシンボルが表出されたか)、シンボルに潜む意図は何かを、個々の事例ごとに検討しなければならない。「クリーン・ハンド」も「シニシズム」もともに「シンボル世界」への埋没に陥らないための意識化や対象化を可能にする視点があらたに求められるのである。

カッシーラーのシンボル認識を受け継ぎ、人間行動の特徴の中心に象徴化能力を置いたのがランガー(S. Langer)である。個別的・具体的な経験を他者に伝達しようとするには、普遍的・抽象的な意味を内在させているシンボルに

変換されなければならない。この「経験の変換」は、「人間の頭脳のなかでの基本的な過程で、精神作用が敏速かつ活発にいきつく終点」である言語によってなされる、と彼女は述べている(ランガー 1961 p.31)。言葉による経験の共有が伝達を容易にしたばかりでなく、経験の蓄積や体系化につながり、かつ集団や社会のなかでの経験の蓄積による文化の形成へと導く。このとき、「定位についてのシンボル」(symbols of orientation)、つまり世界観や人生観についてのシンボルが「経験の変換」のシンボルのなかで最も重要であるとする。イギリス女王の戴冠式はイギリス国民にとって正義や正統性の気分・雰囲気醸成するので「定位のシンボル」であり、イギリス国民に統合を強制力とともに認識させると彼女は指摘する。

しかし、この人生観や世界観は常に変わらないという訳ではない。政治・社会・経済の条件の変化が「定位シンボル」への批判を生む場合がある。第二次世界大戦を境に、「天皇主権」が「国民主権」に転換した日本の「憲政の変化」もある面では「定位シンボルの変化」とみることができる。また、シンボルに新たな意味が付加される場合に——特にシンボルに対する期待と実在とのズレが顕著になった場合に——、「定位シンボル」自体が当該社会にとって障害となることがある。「大学改革」が大学にとって、従来の大学教育や研究の実践活動と乖離した、特定集団のための利益の草刈り場となることが意味付けされるならば(一連の「大学改革」というシンボルの指示対象ないし行為主体、シンボルの発現状況をイメージせよ)、このシンボルは大学関係者にとっての世界観の変更を余儀なくさせられることが例として挙げられる。

エーデルマンの政治言語研究に少なからず影響を与えたサピア(E. Sapir)は、言語のもつシンボルとしての働きをランガーに類似させつつ独自の理論を構築している。彼は、言語を直接経験の報告・言及の代用としてとらえるとともに、現実解釈や観察の枠組みとなる、としている。つまり、現実在即してものを考えるよりも、言葉によって作ら

れた認識・態度のシステムが思考を規定するという意味で、「コトバで考える」とサピアは指摘しているのである。そもそも、現実認識の過程で、コトバを介在させずに「考え」たり「伝え」たりすることは難しい。経験を体系化する過程で、自分自身に対しても「他者」となりうるから、コトバによる抽象化や象徴化に頼らざるをえない。さらに、個別経験は生物として、社会生活を営む存在として類似してくるから、これら経験の定型化がなされ、「文化」として成立するならば、「文化」が思考を規定するといってもよい。<sup>(54)</sup>

サピアはシンボルを、「引照シンボル」(referential symbol)と「凝集シンボル」(condensation symbol)の二つに分ける。「引照シンボル」は「引照を目的とする(経済的な)仕掛けとみなしうる」より具体的に客観的、観察可能な記号体系である。たとえば、演算における数字や記号はその都度現実と照合する必要もなく一定の手続きに従って限られた対応のみを行なう。「凝集シンボル」は、「直接経験の代わりとなる行動に高度の凝縮を施したものであり、意識するしなに関わらず、感情面の緊張をすぐに解放すべく考えられている」シンボルである。芸術の諸形態(音楽・絵画・演劇…)は、日常そのものではないが日常の人間をそれらの諸形態によって端的に表現し、鑑賞する人々になんらかの感情を喚起させるとみれば「凝集シンボル」の例となりうる。

現実には、これらの分類はあくまで「理念型」にすぎないことがわかる。絵画の例を考えてみよう。ある高校の一室に神風特攻隊員の肖像画が飾られている。この肖像画をメディアが「軍国主義の象徴」として報道するか、「悲壮感なし、凜然の美少年」と報ずるかによって肖像画の解釈にある種の判断を与えることになる。この意味においては確かに肖像画は「凝集シンボル」である。しかし、「学校の一室」に常置され、「軍国主義」にせよ「凜然」にせよ、一定の認知や判断を常に「そこから」この肖像画に与え続けるとすれば、肖像画のもつ柔軟な解釈可能性は失われ、「引照シンボル」と化す。<sup>(55)</sup>

逆に、政治家の政治責任を追求するために同僚の議員に対する「意識調査」を行い、三〇人中一七人の「不支持」

があったとする。これによって、当該政治家の政治責任を問うことはできない。「三〇」や「一七」ないし「三〇分の一七」は、「一定の対応関係が了解できる参照シンボル」ではある。しかし、これらの数字が（政治的）意味をもつためには、「多数決」や「不支持の内容」ないし「意識調査の妥当性」といった「言葉」のもつ「凝集シンボル」との組合せをまず念頭におき、次いで「状況」や「文脈」の把握を行なう必要がある。

このように、現実の政治・社会の場面では、シンボルそのものに上記の二種類のシンボルの双方の属性を内包することがある。また、他のシンボルとの組合せやシンボルが用いられる「状況」（主体・客体・媒体・時間的空間的要因など）に応じて一義的には決められない。この「状況」の理解を求めたのが人類学による象徴研究であった。

物質的欲求を合理的に充足する点から意味と象徴作用を重視する人間像の変化が、社会と機能の分析から文化と意味の研究に人類学の関心を移行させた（梶原 1984）。ここに「文化を意味の伝達の体系ととらえ、象徴をめぐる文化の想像力に焦点を充てて、文化研究を行なう」象徴人類学が、顕在化した。梶原（1984）によれば、人類学において象徴がひとつの学問的関心として組織化されはじめたのは、一八世紀ロマン主義を端緒とし、途中経験科学の厳密性への希求が象徴研究から人類学を遠ざけたものの、六〇年以降再活性化された。美学や言語学の援用から、思考体系や儀礼・宗教、民族・芸術を通じて人間独自の文化的想像力として象徴表現や象徴による思考をとらえ、人間の表現力、伝達方法といった視点からの文化装置や演劇性を考察するようになったのである。

加えて、六〇年代からの象徴人類学は、二つの大きな流れを特徴としてみることができる（梶原 1984）。一つは、シンボルを意味の運び手や文化の窓口として、専らシンボルを使う人々に着目した研究がある。たとえばギアツ（Geertz）のように、文化の記述と分析を推進し、社会における人間が象徴を通じて現実をどのように再構成するかを主要な問題として考察する立場がそれである。<sup>(56)</sup> この立場が構造論を中心とした象徴の操作を重視する傾向があるのに対

して、もう一方の立場はシンボルによる人間の動員、とくに社会過程においてシンボルは人間をどのように動かすか（行動にかりたてるか）を研究することに焦点をあてている。たとえばリーチ (E. Leach) は、祝祭や儀礼を対象にして、規範や役割のしがらみから一時的にも脱出して自発的な人間同志の結びつきが祝祭などで生ずることを示した。さらに彼は、このような場では活性化したシンボルが人を動かすと述べている。

前者の流れ（「抽象的」システム学派）の代表的な人物には、前述したギアツのほかにダグラス (M. Douglas) をあげることができる。ギアツは、サピアがしめした「引照」・「凝集」シンボルが「モデル」であることをふまえ、とくに政治におけるシンボルにおいて「引照」・「凝集」が混在していると述べている。政治シンボルにおいては、人間世界を知覚・認識・判断するときの道具であることとともに、このときの「組織化」が大きな役割をはたすとギアツは述べる。すなわち、政治シンボルを用いて、現実世界の諸要素を相互に関連づけて秩序ある体系をつくるときに、あえてはつきりとした意味の整理をせずに、複雑で曖昧な配置にしておくこと（政治ということばを明確には規定しておかないことなど）が、政治シンボルの情緒性を十全に機能させうるものであるとする。「一大政党制」というシンボルを例にとれば、このシンボルが内包する概念は政策協力や「翼賛政治」の可能性への恐怖も、「西欧化」・「成熟したデモクラシー」シンボルと結びつく期待も合わせもつことになる。そのため、より多くの情感をも取り込んだシンボルとなり得るのである。

ギアツは、政治シンボルの情緒による強制力の発言の要件として、シンボルと出来事・行動・制度・過程との関係がちょうどうまく生じたときをあげている。テロ事件を武力によって解決した直後の指導者の「リーダーシップ」シンボルを想起すれば、このことは容易に理解できよう。しかし、これとともにギアツは長期化された政治シンボルでも情念によって活性化されるとしている。先に述べたシンボルの意味の関連づけの曖昧さが作用して、一見情緒的要素は長期化したシンボルには見いだしにくくなる。とはいえ、シンボルの意図がシンボルそのものとなじんだ場合に



は、情緒もあえて意図的に活性化させる必要がない。先の指導者の「リーダーシップ」は、次に起きる「国家的危機」に対策を誤れば一挙に効力を失う（逆の面で効果をもつともいえる）。これに対して、連綿と続く指導者の「正統性」は、「一旦緩急アレバ」噴出しないとはいえない。

「シンボル形態で表現され、歴史的に継承される意味の定型」と、文化をシンボル体系としてとらえるギアツは、「物体、行為、出来事、性質、関係について、意味内容を表わす媒介手段」とシンボルを規定する。ここにおいて、すでに文化という環境をシンボルという道具によって「意味」づけていく人間の存在が前提としてみられる。さらに、このようなシンボルやサインの相互作用の所産である文化を、クモのように自ら紡いで作った網の目とみなし、この網の目の「意味」を考えるためには、法則や説明よりも解釈が重要であるとし、社会生活に根付いた「厚い記述」(thick description)が求められるとしている。ギアツらは、この記述の作成に近づく方法として、民族誌的な記述・手法(フールド・ワークなど)の必要性をあげている。<sup>(57)</sup>

「厚い記述」の概念は、解釈の恣意性をシンボル研究において克服する方法の一つとみることができる。文化の「シンボル体系」を探ることにより、当該文化を共有する人々にとって「厚い記述」は「シンボル体系」から引き出された意味を共有することになる。ここにおいて、特定の文化を共有する人たちのなかで、「厚い記述」の解釈は妥当性をもつ。加えて、人間行動一般に関する「厚い記述」を求めようとするば、異なった文化の間の交流や解釈に活用できる。もつともこの場合には、人間行動一般においてどのくらいの価値や理解の基準が設定できるかが問題となる。<sup>(58)</sup>

政治漫画における「厚い記述」をどのようにして求めていくことができるのだろうか。一つには、ストライヒヤー(L. Streicher)が提示した「戯画の文法」を、修辞学や図像学からの援用によってより精緻に構築することが考えられる。<sup>(59)</sup>このとき、政治漫画に用いられる「ステレオタイプ」的表現(方法)が、それと対応する「文化」を有する人々・集団の思考・行動様式・価値体系を反映する。<sup>(60)</sup>たとえば、著名人の死去を表わすには、「雲の上の天国」に召されてい

く(あるいは、天国に住む)人物が描かれる。このとき、閻魔大王のいる地獄は「墜ちて」はいかない。生前にどのような評価があったとしても「死者に鞭打つことはできない」という価値が優先される<sup>(61)</sup>。

「厚い記述」を求める二つ目の視点として、図像を構成する「背景」をつくる諸要素への着目がある。描き手のパースナリティー、彼と作品が置かれている社会的環境(社会・政治・経済状況)、作品が掲載されているメディア(組織)の属性(政治漫画の場合には、新聞の特徴のみならず、政治漫画と同じテーマを扱っている記事や論説および投書との関係)といった「政治漫画外的情報」の検討をどのような引照基準で行なうかが問題となる。

三つ目の視点は、政治漫画の画像内にある情報と作品との関連への関心の設定である。「見出し」と画像との対応(「見出し」の文字と画像との関連)、画像内の説明語句や、人物の発言を表わすための「フキダシ」と画像との関連をどのように読み込むかが、第一、第二の点とあわせて考察する必要がある。

社会の「汚れ」(dirt)と「不浄」(impurity)の分析から、シンボルの組織化(組織象徴)機能を検討したのがダグラスである。「汚れ」は無秩序状態であり、主観的なものであると彼女は規定する。これらを忌避するものとして認知するところに「不浄」の概念が成立する。言い換えれば、曖昧さや例外・変則を明快で定型的なものに変化させたり、共同体から排除して「処理する」ときに、「不浄」の概念が用いられる。このような主観的世界としての「汚れ」や「不浄」概念は、シンボルによって差異と分類がなされる。すると、属性としての無秩序を秩序づけ、分類的な認識体系に位置付けられることになる。というのは、個々人の経験を媒介した諸価値の集積を「文化」としたダグラスは、「汚れ」による無秩序を収束させようとする人間の感情に着目し、「汚れ」が「文化」に分類できないことから生ずる不安・カオスから自らを護るために「儀礼」をとらえている。社会経験を秩序づけるときに生ずる「境界」領域を「不浄」なものとしてとらえるのである。ここにおいて、「不浄」なものに「名前」をつけるという作業から、確定できず脅威

でもあった「名無し」に「名前」をつけることによって、ある一定の枠（境界）を設け、共同体の秩序安定をめざすことになる。このことは、日本海重油流出事故を「非常時」と規定することによって、「非常時のサイパン旅行」は、市長の説明ではカオス状態から抜け出せなかった人々にとって「不浄」と認知されやすくなったことを想起するとよい。

ダグラスは、「不浄」であってもエネルギーをもつことまでは理解していたが、このエネルギーが文化を創りだすものとなるといった「動的な」考察をせずに、あくまで「静的」な分類と秩序の中への包摂をするにとどまった。これに対して、エネルギーの活性化から文化や社会の変動へも射程に入れた研究が、ターナー（V. Turner）らの（象徴と社会の）ダイナミクス学派であった。

ターナーは、ヴァン・ヘネップ（A. van Gennep）の「通過儀礼」<sup>(62)</sup>の概念を発展させ、「境界状態（リミナリティ）」（liminality）や「コムニタス」（communitas）の概念を提示する。日常世界から全くかけ離れた「分離」でもなく、日常に「再統合」されるでもない、どっちつかずの状態が地位や状況の移行過程には「過渡の儀礼」において表れると彼は述べる。この「境界状態」では、日常の社会・文化的に構造化された社会様式（××市に住む××会社課長の××氏というような）から離れて、地位・身分の差を超えた平等な個人で形成される未分化・未組織な人間の絆（「コムニタス」が生ずるとしている）。

この「コムニタス」状態は、社会関係における様々な葛藤や対立を統合させるために生ずる「社会劇」（social drama）によっても形成される。この場合、戯曲に基づき舞台の上で役者が観客に向かって演ずる近代の「演劇」よりももっと広い概念を「社会劇」はさしている。<sup>(63)</sup>すなわち、演技者の思惑を超えた、観客との相互作用によって得られる演劇全体のシンボリズムを「社会劇」によって表そうとするのである。その結果が「コムニタス」状態である、とターナーは主張していると考えられる。

この点からみると、「社会劇」は現実状況の役割の転換を生む能力があり、それによって従来持ちえなかった意味を発見するという一種の「異化」作用があるとみることができる。ところが、ここにターナーの理論を政治の舞台に援用する際の問題がある。このことを、政治批判としての笑いに即して説明するならば次のようになる。

政治批判としての笑いには、笑う対象を通じて笑う主体の価値や地位の逆転や剝奪を伴う。このとき自然発生的に「社会劇」が生ずるとすれば、政治指導者に対する支配―被支配関係以外の関係が「異化」作用として見出させる可能性がある。ここにおいて、みいだされた関係が現実の社会・政治関係に対して顕在化して、新しい関係となるかどうかの問題となる。前述したダブルスは、「異化」されたものをどうにかして「同化」するかという点に関心があつたと整理できる。これにたいして、ターナーは、「異化」される過程までの動的な側面を重視するが、表出されたものと従来の秩序構成要素との関係については明らかではない。結局、「笑い」から得る批判を提言として確立するには、別の政治手法が求められ、「笑い」そのものが持つ批判による事象の主体・客体双方の対象化は、常に「体制の安全弁」機能に怯えつつ行なわれるという限界をもつことになる。

この「(象徴と社会の)ダイナミクス学派」の中には、ターナーのほかにもコーエン(A. Cohen)が含まれる。彼は社会過程や政治過程と人間とのシンボルによる関わりを、人類学の手法によってマクロ的にあきらかにしようとしたところに特徴がある。政治権力だけでなく、諸々の社会的価値の配分に関わる過程を一見政治的でない出来事の中に見出した「政治人類学」(political anthropology)の立場に属するコーエンは、ターナーら儀礼の象徴的研究と一線を画している。すなわち、ターナーたちが、特定部族の儀礼に用いられるシンボルの凝集性と感情喚起性が政治に利用されることから、ミクロ的なローカルで限定的な変化過程を対象にしていたのに対して、コーエンはすべての社会的事象が政治性を帯びるだけでなく、非政治的で曖昧なものこそ政治的には有効であると指摘するのである。

情報の凝集性と曖昧さ、感情の喚起、といったシンボルの属性の理解は、人間行動・概念だけでなく言語とその形態にも及んでいる。さらに、シンボルの形式と機能とを区別し、諸々のシンボル形式が特定の政治的文脈のもとで同一のシンボル機能が成し遂げられることを指摘した(コーエン 1976 p.42)。彼の事例はインフォーマルグループが諸々のシンボル戦略を用いて、集団を統合する過程をアフリカや中近東における諸集団を例にとって実証しようとしている。非政治の政治性の指摘は、「政治漫画」よりも「漫画」一般がもつ政治的意味合いを考察する手掛かりを与えてくれる。あるいは、イベントや催物の象徴的・政治的意義の考察——「見せ物の政治学」——は既にいくつかの研究がなされている。<sup>(64)</sup> 社会過程に「潜在している」権力関係が、また多次元的に錯綜している権力関係が、どのような象徴体系や象徴形式によって発現するのかを、個別具体例からどのように抽出するかがコーエンの研究でははつきりとは示されていない。

## 2. 社会学

### ① シンボリック相互作用論

人間の行為は、他者とのやりとりを通じて絶えず構成されていく意味世界であるとして、その意味の共有や解釈をシンボルを用いて行なおうとする立場が「シンボリック相互作用論(主義)」(symbolic interactionism)である。行為を、实在視する社会的構造や規範によってのみ説明することを退け、行為者が対象に自らの意味を与え、あるいは他者からの意味を読み取るという、主観的な意味付けに基づく相互作用として行為をとらえる。この主観的な意味の世界は、他者との相互関係を通じて徐々に構成されるものであるから、自ら独自の解釈ができるとともに、他者との了解事項を含むものでなければならない。これは、個人が社会的存在であることにも関連する。個体を維持していくた

めには、環境としての社会や集団と適応・調整していくことが必要になる。このとき、集団がもつ共通の了解事項を読み取る必要がある。このような了解事項・事象がシンボルとして表れるときに、これらとの相互作用によって、みずからの行為を積極的に構成することを学び、個人による判断・行動、独自の見解の養成をはかることがこの立場の重視するところである。人間の内面の思考や情動を人間個人の側からとらえ、相互作用という概念から社会行動との接点を模索したのがこのシンボリック相互作用論であった。

コミュニケーションによって、能動的な存在としての人間を描きだしたのがミード (G. H. Mead) であった。彼は、この能動的存在の根拠を「自己相互作用」に求める。自己には、社会構造や文化を理解してそれらを内面化する働きがあるだけでなく、それ自体に社会過程を内蔵していたと、ミードは考えていた (Blumer 1975)。つまり、「行為者が行為の状況で直面する事柄を自分自身に提示し、これを解釈しながら自らの行為を組織」立てる過程を「自己相互作用」とよんだ。このように自分に対してはたらしかける作用によって、人間は自分の行動を作り上げていく。これは、環境に対して自ら積極的に関わって、その環境をつくりかえる可能性を示唆しているとも言える。

このような、自己の行動の立脚点を内面との対話で得ることによって、組織化された自己の行為を「一般化された他者」として位置づけたミードにとって、シンボルのもつ意味はどのようなものであったであろうか。言葉だけでなく身振りも含めた「シンボル」を媒介にして、他者には情報の伝達を、自己には他者が自分にもっている期待をそれぞれ伝え内面化する。それによって、行為のまったくの恣意的な判断を避け、制御がはたらく、としている。また、シンボルを「反応があらかじめ定められている刺激」と位置付けている。これらから、彼のいう「シンボル」は特定集団に共有される認識や反応を意味していると考えられる。しかし、たとえば時事性の強いテーマで描いた政治漫画はそのテーマが一段落すると風刺の内容がばやけることがある。この場合の政治漫画はミードの文脈では「シンボル」

にならないのであろうか。刺激に対する反応は社会的次元では必ずしも一様とは限らない。むしろ、多様な反応のうちの「最大派閥」にすぎない。この「派閥」の変化に応じて異なった「シンボル」としてみることができよう。

ミードの理論をより精緻化したのがブルーマー(H. Blumer)の理論である。ミードの理論から、①自我をもつ個人から構成される社会、②個々人が実際に行動する状況に注目し、それを解釈した結果としての行動、③他者の行動の配慮・解釈に基づく個人の行動の集積による集合行動、といった点をまとめている。これより、社会のなかの個人の行動は、解釈の過程を通じて個々人が作り上げるとしている。

ブルーマーは、社会を個人の行為の集合体としてとらえるとともに、行為という活動を単位として社会を「活動単位」(acting units)に分けている。「活動単位」は「個別の個人や、共通目的のために構成員がいっしょに行為する集合体や、成員利益のために行為する組織」(ブルーマー 1991 p.110)であり、「市場での個々の購買者、劇団や伝道団、営利企業や全国的な同業者組合」をさすと述べている(p.110)。この「活動単位」は、状況の規定をするとその方向に向かって全体として行動する。逆にいえば、組織体としていったん決定した状況規定を変更することは難しいということになる。また、これゆえに「活動単位」は、その組織化過程において確固たるシンボルを形成する。このシンボルの変更はより大きな「活動単位」の変化に依存するとしている。

重油被害を例にとってみると以下のようになる。重油の直接的(可視的)な被害が一段落すると、「重油汚染」という「風評」が観光地の人数の減少の原因とみなされて、残存する被害の報道に「心理的」「間接的」な規制がかかる。他方、「重油被害」の処理・被害への保障・今後の対策などに「重油問題」の状況解釈を置くならば、いたずらな「風評解消」キャンペーンには同意しがたいことになる。しかしながら、「活動単位」の状況規定が「風評一掃」となるならば、このシンボルに対抗するには「活動単位」間の権力(影響力)の争いとなる。当該シンボルがより大きな「活動

単位」の変化に影響されると、世論形成になんらかの影響を与えるマス・メディアが「活動単位」としてどのようなシンボルを提示するかは重要な点になる。「重油被害」の重要性を維持して、被害報道を続けていくか、あるいは「風評被害」に重点をおいて「風評解消」のシンボルとともに「重油問題」を位置付けるかは、個々人の状況の解釈の判断の根拠（あるいは判断材料の提示）に大きく関わっているので、社会状況のシンボル変化にとって重要となる。

ブルーマーは、解釈そのものに内在するシンボル変化の可能性を読み取ることから、「活動単位」のシンボルの変化に対応しようとした。これは、個々人の解釈の統合が社会活動を規定するという彼の視点からみれば当然である。しかし、先の「重油問題」の例にならうと、状況規定が可能になった「解釈」の主体を特定することはできるのかという問題が残る。このような問題は、彼の「等身大の社会過程への執着」（後藤 1991）に帰着するとはいえず、日常性からシンボルを使って社会を読み取る姿勢は政治学の分野においても再考されるべきであろう。

## ②ドラマ論——ドラマティズム、ドラマトウルギー——

シンボルの利用と役割の理論と実践を分析する「シンボル操作の研究」に「ドラマティズム」(dramatism)がある。「ドラマト」(drama)という言葉は「行なう (to act)」を語源としてもつとされる (O.E.D. "drama")。それゆえ、人間の事象一般の表現形式である「行為」を説明する理論としてドラマ理論が展開された。この中で上記の「ドラマティズム」の概念を取り入れて「行為」をドラマとして説明しようとしたのが、ケネス・バーク (Kenneth Burke) である。彼によれば、「ドラマティズムは分析手法であり、同時に用語系を批判的に検討するものである。そして、その用語系の目的は、人間関係と人間の動機とを研究する最もすぐれた方法が用語の循環系と用語の諸機能を検討することにあるのを示すことである」(Burke 1968 p.445)としている。人間の行為の背景にある動機を分析する手がかりを「ドラマティズム」に求めたバークは、行為を決めるものがその行為を表す用語の中にあるとして、行為の動機とな



るシンボル(システム)を明らかにしていく試みを「ドラマティズム」と呼んでいることになる。

バークがこの「ドラマティズム」を作り出した背景には、政治的行動や政治的レトリックのもつ複雑多岐なパターンや相互の関係・変化にどのように対処してそれらの内実をつかむかという「動機」があった。政治におけるコミュニケーション形態の多様性・曖昧性・多義性をそのまま受容し、そのちにその根源にある「動機」を明らかにすることを彼は考えた。人間行動の「あや」を含み入れる手段として、「ドラマティズム」を導入したのである。「ドラマティズム」のキータームとしてバークは、「行為」(act)、「場面」(scene)、「行為者」(agent)、「媒体」(agency)、「意図」(purpose)の「五つ組」(pentad)を提示する(バーク 1982 p.17-25)<sup>(9)</sup>。そして、「人間の動機の所在を明らかにするすべての陳述は、五つ組(の認識)から起こり、五つ組(の再認識)によって終わることを明示できる」(p.19)と述べている。

バークの「ドラマティズム」は、言葉をシンボルとして改めて認識したところにも特色がある。言葉が表す意味内容は絶対的なものではなく、その言葉が含まれる用語系における位置関係によって決まるという相対的なものであるという点<sup>(6)</sup>がそれである。これによって、人間の発する言葉は状況に大いに規定され、その都度の役割やその役割期待に応じた「演技」を人間は強いられることが導かれる。ここにおいて、役割理論や演技との接点をバークは持つことになるのである。

バークの理論を引継ぎ、社会とドラマとの関わり合いに着目したのは、ダンカン(H. D. Duncan)である。彼は、「社会的コミュニケーションにおける秩序の維持・統合を劇モデルによって分析した」(見田 1988)と位置付けられている。実は、ダンカン(1980)をみても、「コミュニケーション」の内容は今ひとつ明らかではない。とはいえ、「公理的命題」という証明なしで用いられる命題群に、有意意味なシンボルを使用する場として、「コミュニケーション」が措定

されており、しかも社会的な状況で集団や共同体が存続していくために必要不可欠なものの正当化に寄与するとしているところから、秩序の安定をもたらし社会的相互作用の一環として「(社会的) コミュニケーション」をとらえることができよう。

また「形式が内容を規定する」という見解をもとにして、彼はシンボルとドラマの双方を「階統秩序」(hierarchy)との関係で論述する。彼はシンボルの個性ないし解釈の多様性を認めつつも、「何を伝えるか」(内容)よりも「どのように伝えるか」(形式)の面を重視したのは、シンボルの「公的な」特徴によって社会の「階統秩序」が体現されることの重要性を認識していたからである。ここにおいて、シンボルの相互作用を考察するシンボリック相互作用論に端緒をもちながら、実際にはマクロな視点でシンボルの属性を考察しようとしていたのがダンカンであったのである。社会を「階統秩序」とみなし、この秩序をいかに合理化するかをめぐって様々な勢力が闘争する。この「階統秩序」が端的に表象されるのは、悲劇と喜劇というドラマの形式においてであるとダンカン是指摘する。悲劇によって、犠牲者を設けて公的に処罰すれば、みずからの罪と恐怖から解放される。つまり、個々人が持っていた罪と恐怖を具現化して意識の俎上にのぼらせ、罪や恐怖への対処を表明し、行動につながることができる。喜劇は人間同志の批判に訴える。社会的な最高善——人間として自由な意志の伝達可能性を条件とする——に到達するための手段が喜劇であると彼は述べる。人間として悪に対峙し、演技者を笑うことによって、人間の理性への確認がされるのである。これは、笑うことによって自己を対象化する「精神の自由」をもつことに照応する。ただし、ダンカンの強調する点はいくつかで「社会秩序における喜劇」の機能である。したがって、社会秩序に必要な役割を何度も公共の場で繰り返上演することによって、観衆の賛意を得、自らの権威を正当化することがはかられる。特に「笑いから生まれる社会的陶酔」は「社会的紐帯を強める」。笑っているうちにいつのまにか一体感が観客の間に出てくることを指している。共同体の集団としての行為は、喜劇や悲劇というドラマで演じられる行為(演技)を通じて(実際に演ずることによっても)構成

員に習得される。政府におけるドラマは一見、悲劇の要素が強い（真面目なドラマとみれば）が、祝祭、ゲーム、芸術なども喜劇とみなすならば、政府が演ずるドラマの喜劇性はかなり高い割合で登場することになる。<sup>(67)</sup>

日常生活状況における人々の関わり合いに着目し、対面状況において他者とのように折り合いをつけていくか、それによってどのような社会的現実を構成しうるかを検討したのがゴフマン(E. Goffman)である。彼は、規範のあるコミュニケーションの中でつがなく振る舞う社会的自己をもつ人間像を確立しようとした。社会的現実を自己と他者で相互に形成する社会的行為者間の働きに端を発して、次いで対立状況にある行為者の間の現実の獲得をめぐるゲームや葛藤にゴフマンの関心は移行してくる。ここにおいて、政治との関連を彼の「ドラマトゥルギー」(dramaturgy)に見出だすことができる。

従来「脚本」「戯曲術」をさしていた「ドラマトゥルギー」という言葉は、日常生活での行為者のやりとり（演技者―観客に援用されて概念化された。彼は、社会における個人は、社会の各領域がその個人に求める姿に自らを適合させることによって、社会のなかでの存在を維持できるとして、そのときの自己を装う戦略を「ドラマトゥルギー」とよんだ(ゴフマン 1974)。この戦略は、個々人が様々な領域で出会う「対面状況」においても登場する。相互作用の円滑化を目的として、当面の社会状況を「定義」して、自己を提示する。このとき、他者が自分に抱くイメージをできるだけ損ねないようにすることが重要であるとゴフマンは述べている。このイメージの保持にかかわる戦略に、視線・仕草・察などによる「印象操作」(impression management)がある。

このイメージ保持ないし、それを目的とする「印象操作」は、社会的現実を他者と協力して構成するときでも、あるいは対立する他者を駆逐するためにみずからの社会的現実の定義を構成するときでも、どちらにおいても重要な要素となる。対立が深刻化して紛争になることによって費やされるエネルギー、ないし獲得された現実と利益を対立勢

力に抗して維持していくエネルギーの大きさを考えると、他者のみたイメージは変えることなく密かに現実の定義付けを進めるほうが対立の顕在状況よりもエネルギーの節約と利益の保持に有効であると考えられる。ゴフマンの理論は「外観重視」「第二次適応の理論」と批判(グールドナー 1978)を受けるのは、この微視的な姿勢が人間不信に根ざしたものでないかと推測されるからである。しかし、「理念」や「理想」が個人の領域から集団の領域に移されるときに、これらの言辭がシンボルとして意味内容が変化するという現実をみると、ゴフマンの理論を分析道具として政治に援用する可能性は残されている。ただし、ウェーバーとは異なった意味において「理念」や「理想」をどのように変質させずに観察者が維持していくかが問題となろう。

人生がドラマであることをゴフマンは、メタファーとして述べているのに対して、バークの「ドラマティズム」は構造的でダイナミックな普遍性をもつとして、バークの再評価を「実存社会学」の立場から指摘したのが、ライマン(S. Lyman)とスコット(M. Scott)である。彼らは、普遍化・客観化しにくい主体的・内面的な個の立場を強調することによって、実存としての自己と他者との関係から社会を概観する「実存社会学」の立場をとり、人間の全体像を凝集させたドラマによって相互作用をとらえようとした(ライマン、スコット 1981)。真理は日常生活の中に存在し、常に発掘の意志を持ち続ける人間によってみることができると述べ、行為の所産としての人間の事象は反復とシナリオによって、行為を具象化する。これはドラマによる真理の体現にはかならない。このように、人間存在をシンボリックに描きだすドラマは、根源的かつ存在論次元によって把握されるという。

また、彼らは政治と演劇との関係に言及している。人生がドラマと劇場になりうるとすれば、権力の獲得や支配関係の樹立を目的とする人間行動はドラマ的であり、ドラマによる統治を「演劇政治」(theatocracy)と名付けた(ライマン、スコット 1981 p.181)。彼らはこの概念を、政治体制を説明するものとしてはロシアの劇作家エヴレイノフ(N.

Evernoft) から、権力獲得の技術を説明するものとしては、マキャヴェリ (N. Machiavelli) からそれぞれ援用して、権力と支配の政治的舞台のみならず非政治的組織の政治的特質についての「政治社会学的分析」の必要性を説いている。

加えて、政治権力の正統(当)性の根拠として、六つの神話(「英知と知識」、「神の是認」、「勇氣とヒロイズム」、「同意と多数支配」、「伝統と慣習」、「歴史的必然の力」)を提示する(ライマン、スコット 1981 p.189-208)。これらが支配集団の権力の確認・正統(当)化としてはたらくためには、ドラマを演ずる必要があるとしている。これらは日常生活に密着したドラマ性に基づく神話かどうかが疑問ではある。観客としての被支配者がどのくらいドラマに埋没しているのか、あるいは埋没できずに支配の正統(当)性を認めることは、上記の六つの神話以外の社会・経済的な要因が作用していることにはならないか、が問題となろう。

### ③政治漫画との関連——「背景」分析から「内容」分析へ——

政治漫画とドラマ論との関連については、政治現象の時系列分析においてドラマ論を用い、分析の道具として政治漫画を用いて検討したことがある(茨木 1986)。この場合はあくまで政治現象の展開を外在的につかむための分析であり、政治漫画分析の周縁的要素にはなっても、政治漫画自体の分析にはなっていない。政治漫画自体が政治現象の一断面を切り取って鮮明に表わすだけでなく、その断面から当該政治現象の全体像や政治的意味をシンボリックに表わすものであるならば、政治漫画「自体」の分析においてもドラマ論による分析の可能性が存在しよう。

政治漫画の内容分析へのドラマ論の援用は、バークの「五つ組」をもとに「主体」「客体」「修飾語句」「述語動詞」などの「文法用語」からの類推による枠組みを構成して既に検討を加えた(茨木 1990)。しかし、これらの研究は、バークの理論の持つダイナミックな性格を十分には反映できず、ステイティクな分析にとどまっている。近年、「漫画」

の「形態的」要素(線、画面、コマ、フキダシ、など漫画を構成する記号)に着目した研究(四方田 1994、夏目 1996)が登場している。これらの「形態的」研究はコマ漫画に重点が置かれ、一コマ漫画である政治漫画にはあまり関心を向けていない。しかし、彼らの「形態的」研究と従来の修辞技法の知見とを総合させていく手掛かりを、ドラマ論に求めることができるのではないかと考えられる。そのためには、従来の政治漫画の背景としての素材のドラマ的研究のほか、に外在的接近として、政治漫画と新聞の他の情報との関係の定式化を見つけたことや、政治漫画の中の文字情報と画像との関連を明確にすることがある。さらに、「形態」論と修辞技法にドラマ論(たとえばバークの「五つ組」の相互比率の検討など)を加えて図像の解釈論の一般化を試みる必要がある。「白黒はつきりさせるのが政治漫画」という時代は既に過ぎ去り、むしろ一コマに無数の「流れ」を見つけたことが政治漫画自体にも政治漫画研究にも共に求められているのである。そうだとすれば、一コマの中にある「流れ」をドラマ論によって導きだすことも考えられてよいと思われる。

(54) もっとも、言語は文化のみに規定されるわけではない。言語のもつ個々人にとつての個性性は同じように大きな役割をもつ。さらに、文化を言語が規定する場合がある。

(55) 絵画の「引照シンボル」化は、この他にも一定のマニユアルに沿った絵画の見方を試験の問題に課することによつても生ずる。一般に、学校教育における芸術の鑑賞がそれにあたる。肖像画、意識調査双方の「シンボルの変換」の要因はマス・メディアであったが、このような「変換」を生じさせる「状況」の構成因子として上述したような「教育制度」によるものも考えられる。

(56) レヴィ・ストロース(C. Lévi-Strauss)に代表される構造人類学を中心とした「抽象的システム学派」(梶原、1998)をさす。リッチやダグラスがこのカテゴリーに含まれる。ギアツは「象徴と社会のダイナミクス学派」とこの「システム学派」との「境界人」(マージナル・マン)であるといったほうがよい。本稿ではシンボルとその担い手という分類視点から、従来の説明と少し異なる立場をとった。

梶原 (1984) は、象徴人類学の特徴を、①文化理論 (認識)、②非合理的や例外とみなされる事象を対象とする独自性、③従来の理論・方法論への批判 (機能主義パラダイム、フィールド・ワークの再検討)、客観性に対する間主観的な理解の重要性の指摘といった提言、④現実の多義性と多次元性への認識、⑤積極的な象徴観、⑥多領域との協同性、のように六つの観点から整理している。(57) 標本調査には次のような問題がある。標本が象徴する対象者全体の心理的傾向と調査者が得ようとする回答者の意向は必ずしも同じではない。本来は前者を調べるはずが、後者の意向に前者を合わせることになることがある。手続きの「実証性」への盲従が回答の「厚い記述」を作ることを阻んでいる。さらに「実証結果」が、メディアを媒介にして発表されるとき、この「結果」が歪曲されることも考慮すべきである。たとえば、「世論調査」結果を各メディアがどのように利用したか、そしてどのような影響を受け手 (有権者) に及ぼしたかは、選挙時に投票行動の世論調査をもとにした「アナウンスメント効果研究」から推測されるように、調査者の思惑・メディアの歪曲 (作為の有無は問わない) が反映されるとみられるが、直接実証した例はあまりない。メディアの意向が介在することについては、新聞社の世論調査結果の発表の「時期」 (タイミング) によって影響に差が生じるように思われる。

(58) 次に、宗教の社会学的分析を援用することもできよう。

(59) Harrison (1981) 'Medhurst and Desousa (1981) を参照。政治漫画そのものが「厚い記述」であり、それを解釈することによって、文字として「厚い記述」が設けられる。

(60) Medhurst and Desousa (1981) の修辞技法の中の、「文化的はめかし」 (cultural allusion) がこれに近い内容を持つ。

(61) 「天国」と「地獄」は象徴するものと同じ種類のものではないことも、この差異が生じたことの要因となっていると考えられる。「地獄」は「この世」の悲惨さを象徴する場合によくシンボルとして用いられる。「天国」は、楽天地の象徴の他に「あの世」の望むべき姿をも含んでいる。これがはたして異文化受容の際に生じた文化的差異かどうかは検討の余地がある。

(62) 人の一生の節目 (誕生、結婚、死) は、人がそこで課せられた新しい役割を得る機会であるとして、これらの節目に儀礼を行なう。この儀礼を「通過儀礼」 (rites of passage) とよぶ。この「通過儀礼」の概念は拡張されて、場所・地位・役柄などの移行 (引越・転勤・転職など) に際して行なわれる儀礼も「通過儀礼」とみなされている。

(63) この場合の「社会劇」 (social drama) は、観客からの反応を手掛かりに集団内の諸問題を解決するために演ぜられる「ソシオドラマ」 (sociodrama) ——アメリカの精神病理学者モレノ (J. Moreno) が提示した——の概念に近い。

(64) メディアと文化との関わりを社会学と人類学の双方の視点から読み説いたのが吉見(1993、1994)の研究である。

(65) 「行為」は動機が思考や行動という形をとって表れたものをさし、「場面」は、行為の背景、行為生成の状況を表わし、「行為者」は、動機を「行為」として行なう主体であり、「媒体」は、行為の際の動機の発現のための道具、方法を、「意図」は、行為の原因・理由をそれぞれさしている。また、これらの「五つ組」は互いに関連しあって一对のパターンをなす(バーク 1982 p.29-46)。

(66) 「命名」(naming)のもつ政治的重要性についてもバークは言及している。ある言葉の内容を知るために、他の言葉に置き換えることによって、当該の概念の規定のされ方——何が含まれ、何が排除されるかの力学——が明らかに become と述べる(Burke 1954)。ここにはエーデルマンのいう「カテゴリー化」の一面が含まれている。

(67) 日本の場合、国家規模の「喜劇」を例として挙げにくい。これは、少なくとも近代以降の日本では、「喜劇」が全くのカス抜きとしてのみ扱われたことによるものと思われる。あるいは、ゲンカンの「神への罪・恐怖」悲劇、「人間への批判」喜劇」という図式に則るならば、日本の政府を国民が自分たち人間の作ったものとは認めていないからであろう。